

内永ゆか子著「日本企業が欲しが『グローバル人材』の必須スキル」朝日新聞出版 2011年9月30日刊を読む

「そこそこ」の英語力を

1. いよいよ、懸案事項の英語です。もちろん、英語が全然話せなくては、海外旅行程度なら何とか乗り切れても、ビジネスシーンでの異文化コミュニケーションはおぼつきません。
 - (1) 今やパソコンを使えることを特技と言う人はいないように、英語はすでに誰しにも求められる「標準スキル」となっている。その平均レベルに達するために英語を学習しているのは、日本人や韓国人だけではありません。実は今、世界では空前の英語ブームとも言えるほど、英語人口が飛躍的に増加しているのです。
 - (2) その急増ぶりは明らかで、世界の英語学習者の推移は右肩上がり増加。2010年時点で英語人口は約20億人に達していると推計されています。世界人口の約3分の1の人が英語を学んでいる計算で、まさに「世界経済が1つ」になったグローバル化の波と呼応した現象です。
2. 英語人口が急増している現況には、2つの側面があります。
 - (1) 1つは、英語を話せなければ、ビジネスチャンスを失うということ。
 - ① 第1章で、英語を話せない人は就職ができないという韓国のきびしいお国事情について触れましたが、これは世界共通の流れなのです。
 - ② たとえば、ヨーロッパでも1993年のEU(欧州連合)発足にともなって、母国語以外に最低2カ国語を習得する「マルチリンガリズム」が政策として進められています。その結果、公用語とした英語を学ぶ人が急増。特徴的なのは、ルクセンブルクやオランダ、スロベニアといった小国や東欧、旧ソビエト連邦諸国において英語熱が高まっている点です。つまり国内市場が小規模な国で、貿易をはじめとする対外ビジネスを拡張するため、あるいは国外でビジネスチャンスをつかむために、英語を習得する傾向が強まっているのです。
 - ③ アジアでも同様の傾向が見られます。外資誘致に積極的なタイ、工業化が進むマレーシアなどの国でも英語人口が増えており、中国も国を挙げて英語力強化に励んでいます。

日本企業のグローバル化への取り組みが今後さらに本格化していけば、英語が話せるか話せないかで、様々なビジネスチャンスが決定される「言語格差」が拡大していくことは確実でしょう。となれば、「もし仕事で英語が必要になったら勉強すればいいや」という発想では「Too late.(遅すぎる)」。

繰り返し述べているように変化のスピードは以前と比べて格段にアップしていますから、英語力も普段からスピード感を持って鍛えておくことが肝心です。

(2) 英語人口急増が持つ 2 つ目の側面は、ノンネイティブがマジョリティー(多数派)になること。

① 実は、今や英語人口の約 70% は英語を母国語としないノンネイティブが占めており、英語を母国語とするネイティブは世界人口の 5% 程度にすぎません。ということは、求められる英語レベルは下がっている、と言ってもいい。あえて「そこそこ」の英語力と書いたのはそのためです。つまり英語を母国語としない私たちが、ネイティブの英語レベルに追い付こうと躍起になる必要はもはやない、ということです。

② 誤解を恐れずに言えば、世界で話されている英語は、「クイーンズ・イングリッシュ(イギリスの標準英語)」や「アメリカン・イングリッシュ」だけではないのです。オーストラリアで話されている「オージーなまり」の英語もあれば、インドで話されている「インドなまり」の英語もある。シンガポールで話されているのは、独特のアクセントと語彙を持つ「シングリッシュ」ですし、当然、中国語なまりの英語も、フランス語なまりの英語もあります。

③ 国際会議のような場面では、こうしたお国なまりの英語が飛び交うのは日常的な光景。そう考えれば、私たちも日本語なまりの「ジャパニーズ・イングリッシュ」で自信を持って堂々と話せばいいわけです。「発音がよくないから」「イントネーションが変だから」と臆する必要などはじめからないのです。

④ 英語人口のマジョリティーがノンネイティブになったことで、ネイティブの間でも以前には見られなかった新しい動きが生まれています。たとえば、ノンネイティブにも理解しやすいように、「複雑なイディオムは使わない」「繊細なニュアンスのある言い回しは避ける」「ローカルにしか通じないジョークは言わない」「難易度の高い単語は使わない」といった一定のルールを設けて、シンプルでわかりやすい英語を使うように心がける流れです。

3. 英語力を身につけようとする際、まず注意すべきは、何のために英語が必要なのか、目的を明確にしたうえで実践的なスキルを磨くことです。

(1) 第 1 に、自分が主にどういう場面で英語を使うことが多いのかを洗い出してみる。

会議中に英語を使うことが多ければ、会議における主張の仕方、賛否の表明の仕方を中心に、進行(ファシリテーション)のコツを学ぶ必要がありますし、プレゼンテーションで英語を使う機会が多ければ、大勢に向けて説得力のある話をするコツや、ジェスチャーなどの非言語コミュニケーションを身につけるべきです。交渉で英語を使う人には、どうすれば有利な条件を引き出すことができるか、上手な駆け引きのスキルが必須となります。

(2) 思うに、日本人が英語を苦手と覚えるのは、こうした目的意識がはっきりしていないことに起因しているのではないのでしょうか。受験英語や TOEIC で文法や語彙だけを頭に詰め込んでも、ビジネスでは歯が立ちませんから、結果として、肝心の現場で挫折し、英語コンプレックスを抱え込んでしまう。ビジネスで使える英語を身につけるには、まず自分のなかで目的を明確にして、その目的にかなったスキルを学んでいく必要があります。

(3)言葉は道具にすぎません。何に使うのかわからない道具を、えんえんと磨いていても仕方がないのです。会議で意見を伝えたい、説得力のあるプレゼンテーションをしたい、交渉を有利に進めたいなど、きちんとした目標を持って、最良の道具を磨いていくのが一番の近道であることは言うまでもありません。

(4)具体的なスキルについては追々紹介しますが、私たちが目指すべきは「英語オタク」ではなく、「タフな実践レベル」で英語を使える人材。ですから、基本的なスキルを学んだ後は、恥を捨て失敗を恐れず、なるべく実地に近い形でトレーニングをするようにしましょう。

4. 「自分」を語る力

(1)グローバル化が進み、多種多様なチームに身を置くようになると、「自分が何者なのか」を語る力が非常に重要になってきます。

異なる国籍を持つ人間が集まれば、たがいに生活習慣や宗教が違うのは当然です。受けてきた教育も、親しんできた文化も、何から何まで異なります。

(2)もし、日本人であるあなたが、そうしたグローバルチームに入れられたとすれば、あなたは「あなた」であるだけでなく、「日本人代表」としてメンバーから認識されることになります。ですから、自分の意見を述べることはもちろん、日本という国について語ることも同時に求められるわけです。

(3)あなたについて語れる人があなたの他にいないように、日本について語れる人もあなたをおいて他にいない。そうした状況で質問をぶつけられれば、自分の考えをきちんと言葉にして、相手が納得するまで話し続けなければなりません。何しろ、バックグラウンドがまったく異なる人が相手ですから、生半可な説明では納得してくれないでしょう。ましてや、前に発言した人を指して「Me, too. (私も同じです)」というような反応は絶対にありえない。

P76 ~ 81

[コメント]

英会話のベルリッツコーポレーションの CEO 内永ゆか子先生の英語の大切さの御説明は極めて示唆に富む。

— 2011年9月16日 林 明夫記 —